

総論 熊野水軍小山家文書の総合的研究

熊野の海域史・序論

坂本亮太
SAKAMOTO Ryota

はじめに

熊野地域の中世史は、これまで主に熊野三山や熊野参詣の歴史、すなわち聖地熊野の歴史として描かれてきた。熊野三山は中央で信仰を集め、中世成立期には天皇・院・女院・貴族等による熊野参詣が行われた。また中世後期には熊野の御師が全国各地の人々と師檀関係を結び、多くの参詣者が先達に率いられて熊野を訪れるとともに、熊野比丘尼等によって全国各地に熊野信仰も広められていた。このような研究が進められている背景には、関連史料が熊野三山とその近辺に多く残されていることがある。

そういったなかにあつて、西牟婁郡も含めた熊野水軍（熊野の武士たち）の動向やその歴史を明らかにすることは、熊野三山中心の歴史像を捉え直すことにもつながるだろう。熊野水軍は熊野（紀伊国西牟婁・東牟婁）に拠点を有して活動する武士団（熊野の武士たち）の総称であり、史料的には「熊野衆」「熊野悪党」「熊野海賊」なども表される。平安時代後期から鎌倉時代前期、熊野水軍は熊野別当を中心に組織・構成されていた。この点、熊野水軍も熊野三山とは無縁ではなく、密接に

関わる存在といえる。平安時代には熊野別当湛増など、熊野三山を中心とした存在であつたが、承久の乱以降、熊野三山・別当の力が衰えていくなかで、それまでは沿岸部で活動していた武士たちが歴史の表舞台に登場してくるようになる¹⁾。鎌倉時代後期以降になると、東から榎本（有馬）氏、鶴殿氏、色川氏、太地（泰地）氏、周参見氏、潮崎（塩崎・汐崎）氏、小山氏、安宅氏など、沿岸部各地で地名を冠するような武士団が立ち現れてくる【図1】。熊野水軍の各氏は、熊野三山の神官（社家・御師）や平家落人、鎌倉幕府御家人など出自は様々で、山間部を拠点にするもの、沿岸部で交易活動に従事するものなど性格も多様で、非常に個性的で独自の展開を遂げた。

本共同研究は、新たに原本が確認された和歌山県立博物館が所蔵する久木小山家文書の調査・研究を中心としつつ、熊野水軍の存在形態と動態、さらには紀伊水道の歴史的位置の解明を目指すものである。近年、これまで所在不明とされてきた小山家文書の発見が相次いでいる²⁾。とりわけ、久木小山家文書は質・量ともに豊富で、熊野水軍・小山氏研究の中核となる文書群である。そのため、久木小山家文書の整理と公開、さらには各小山家文書（二部・神宮寺・久木・西向）の集成が求められている現状にある。網野善彦氏は既に「西向の小山家文書に、久木の小山

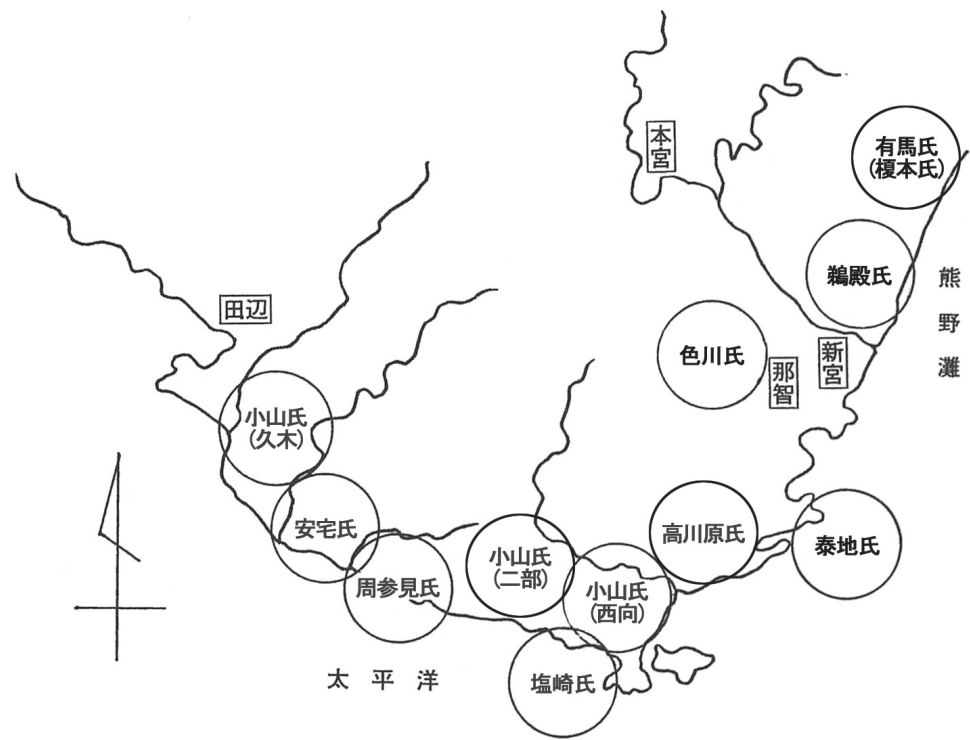


図1 熊野武士勢力図

家、さらに神宮寺、二部の小山家まで加えて総合的に研究を進めるならば、阿波国まで含む熊野水軍の実態をより鮮明にすることも可能と思われる」と先駆的に述べる³。西向小山家文書を調査・公開した神奈川大学日本常民文化研究所が蓄積する成果も活用しながら、神奈川大学日本常民文化研究所と連携することで、網野氏の見通しを発展的、かつ批判的

に継承する必要がある。

本共同研究においては、熊野水軍のなかでも豊富な文書を有する小山氏を中心に、熊野の武士たちの存在形態・動態を押さえることで、紀伊半島沿岸部・紀伊水道の海域史を探るための視座を示したいと考えている³。特に、紀伊半島（とりわけ熊野）は太平洋岸航路の要衝で、東日本・西日本との交流を知るうえでも重要な地域に相当する。にもかかわらず、文献史料・考古資料ともに数が十分でないうえ、検討できるような環境も未だ整っていない状況にある。そのため、一つの試みとして、紀伊半島沿岸部で勢力を誇った武士たちの本拠景観と動向を明らかにすることで、その一端に迫れないかと考えている。しかも、熊野の武士たちは、同時に熊野三山の門前などにも居住した御師や問丸であることよりすれば、自らが各地へ動くと同時に、熊野へ人・モノを誘引する地域の担い手とも評価できる。すなわち、どのような勢力が、どのような場所を拠点（城館と浦・湊との関係）として抑えていたのか、そしてその勢力はどのような活動を展開していたのかを把握することによって、紀伊半島南部沿岸地域の海域史を解明していくことが可能となるのではないか、という見通しである。

そういった点にアプローチできる好素材が、紀州小山家文書と考える。紀州小山家文書の検討をベースに置きつつ、上記の課題を検討していくが、詳しくは報告書の論考編・資料編をそれぞれ参照していただきたい。この総論においては、小山氏の本拠、熊野の武士たちの海域での活動の紹介を中心に、熊野の海域史を考えるための素材を提供したい。

一 西向小山氏の本拠とその性格

1 西向小山氏の本拠

紀州小山氏は、鎌倉時代後期に熊野の沿岸部で蜂起していた「熊野海賊」を取り締まるために、関東から派遣された御家人であったとされる。そのうち、兄（または弟）の経幸が日置川流域（三箇荘久木）に、弟（または兄）の実隆が古座川流域（塩崎荘西向浦）に定着し、それぞれ久木小山氏と西向小山氏となった。西向小山氏については、網野善彦氏が西向小山家文書の紹介と解説をするなかで、詳細に検討を加えている⁵⁾。西向小山氏の祖とされる小山実隆は、後醍醐天皇から左衛門少尉に任じられ【西向一号】、以後も南朝方に属し（一時期北朝方にも与していたか）戦っていた。特に、小山実隆は「熊野山上綱」であったこと【西向九号】、また瀬戸内・阿波・淡路での戦いに関わっていた【西向七・八号など】点が注目される。史料にも「出向海上」「早船」ともあらわれ【西向八・九号】、まさに紀伊水道をまたにかけて活動する水軍領主であった。

西向小山氏の定着時期については明証を欠くが、屋敷の鎮守とされる稲荷神社が建武三年（一二三六）、氏神とされる日吉神社が応永元年（一三九四）に勧請されたと伝えられることから（後述）、概ね南北朝～室町初期に定着したと想定できよう。西向小山氏は、古座川河口部（串本町）に本拠を形成していた【図2】。JR紀勢線古座駅周辺が小山氏の屋敷跡と伝え（実際に近代史料でも場所を確認できる）、現在「小山井戸」（串本町指定史跡）が残る。付近には「土井」「竹ノ鼻」という領主居館を想定させる地名も残る。さらに付近には菩提寺の成就寺・六勝寺、裏山に小山城跡（鎮守の稲荷神社）も残る。

古座川を少し遡ったところには、小山氏が応永元年に

勧請したと伝える日吉神社が鎮座する。日吉神社は、『紀伊統風土記』には以下のように記される。

【史料1】『紀伊統風土記』三前郷 池口村の項

村中にあり、中湊・西向・神川、三箇村の産土神なり、社は当村領にあれども、当村の産土神にあらず、拜殿あり、応永元年十二月小山五郎左衛門隆春の一族勧請の棟札あり（今西向小山氏所持す）、土人伝へいふ、小山氏三王権現を信仰して、領地の内、今の社地を見立て造



図2 古座川河口部の西向小山氏関係地図

營し、一族共に氏神とせし社にして、中湊村等三箇村は一族多かりしかば、今に至るまで三箇村の氏神とするなり、後、寛永十七年、高川原摂津守の末葉六右衛門尉、再建に依りて祭祀の座に小山氏の子孫を左の上座とし、高川原の子孫を右の上座とす（但し右の上座は今も出席せず）、什物、本地仏の鏡八面、本像二十一体有り。又地引網一帖あり。古より宮に属し、網にて祭祀の前日には、供物の鯛を漁る網なりしに、今稼網となり、中湊網と云う、中湊村は海村ならざれども此一帖は漁事をなすことを許さる、

日吉神社は小山隆春が応永元年（一三九四）に勧請したものであるという。というのも、小山隆春は山王権現を信仰していたこと、また小山一族が中湊・西向・神野川に多かつたため、三か村（現在は中湊、原町（西向）、目津・大浦（西向）、神野川の四地区）の氏神としたためであるとす。その後、寛永十七年（一六四〇）に高川原氏が再建したために、祭祀（着座）の際には小山氏と高川原氏が左右に分かれて上座に座ることになったが、『紀伊続風土記』が編さんされた天保（十九世紀前半）頃には高川原氏は「右の上座」には出席しておらず、衰退していたのかもしれない。高川原氏も古座川流域に勢力・拠点をもった熊野水軍の一つである。

さて、小山氏が日吉神社を勧請したと記す棟札が以前はあったようである（『紀伊続風土記』でも西向小山家が所持しているとある）。戦前に旧古座町内の歴史を丹念に調査研究中根七郎氏は『神社と古座』のなかで、「当時の古き棟札あり。今、其遠裔小山弥八郎、之を襲蔵せり。之を見るに底辺八寸許り、高さ壹尺許り、上幅七寸許りにて、棊子の形をなしたる厚八寸許りの古き木札なり。全体茶褐色となり、記載したる文字煤びて読み難きも、大様左の如し」と棟札の形状や状態を報告したあと、さらに続けて棟札の銘文を紹介している。

【史料2】日吉神社棟札写

（表）

中七社	八王子	王子宮	早尾	大行事	聖女	氣比	牛御子
	虚空蔵	文殊	不動	毘沙門	如意輪	聖観音	大威徳
上七社	大宮権現	地主権現	聖真子	八王寺	客人	十禅	三宮
	本地釈迦	本地薬師	阿弥陀	千手	十一面	普賢	地藏
下七社	小禅師	新行事	岩滝	悪王子	山末	劍宮	龍寸弥勒
	吉祥天女	弁才天	摩利支天	不動	大日	日光	月光

（裏）

右造立、山王宮、応永元歳甲九月二十九日、一族等信心、三禮勧請申所如件、

花子三十五ハイ並御ホコノヤク一人カイサ「」モニ九人也

セ人ノヘイサミ御マクノサイ一クロノ一牛莠一ニ「」一ム
 キマメ一アオイキクツカタノモチイ一サン五「」ウエ
 「」カイヲミナノサクヘシ并ニ侍ヤク人ヲ
 一和田カケイ 一方人ノ七郎 一古田 一カスエ 一小山ヤ六郎
 一北太郎 一ヤ三郎
 一ホコモチ ミヤラ七人 二人ミ 并ニ 一沖ウ 一橋爪
 大工藤原

応永元年（一三九四）に小山氏の一族（小山弥六郎が当時の惣領か）が勧請したこと、そして当時から日吉二十一社を祀っていたことなどが分かる。裏面は、祭祀などの役や供え物の次第のようではあるが、十分に意味を取ることができない。なお、西向小山氏の城館があった城山には稻荷神社が鎮座し、日吉神社の遥拝所となっていることも特徴的であ

る。稻荷神社も建武三年に小山氏が創建したと伝え、例祭の際には、獅子舞が日吉神社に向かって奉納されるという^⑩。日吉神社の勧請には小山氏が、再興には高川原氏が関わっているように、この日吉神社は熊野水軍と非常に関わり合いが深い神社といえよう。しかも、室町初期に勧請されている点にも注目しておきたい。末尾に名前を連ねている人々は、「侍役」を勤めており、村の侍層の可能性もある。そのうち、和田氏・橋爪氏などは、江戸時代に廻船問屋を営む家でもあり、古田も古座川河口の村名である。「一族等信心三禮勧請申」とあるが、一族のほか周辺に有力者も関わって勧請された氏神であった。

日置川河口部に本拠を構えていた安宅氏も、南北朝期に安宅荘内の寺社の整備を推し進めている^⑪。南北朝く室町期にかけて、領内の寺社を整備するという動向は、熊野の武士たち(熊野水軍)に共通して見られる傾向・動向だろう。南北朝内乱の過程で、熊野水軍は熊野三山の統制から離れ、自立化を遂げつつも、各地の戦場にかり出されていた。それが一段落つき、本拠地で活動を再開するなかで、地域内の寺社の整備を行った可能性が考えられる。

2 西向小山氏と古座川流域の地域社会

天文十六年(一五四七)の南光坊道範借錢状には「古座小山殿」、文禄二年(一五九三)の潮御崎神社棟札には「大旦那古座小山殿」とあらわれ、現地では当時、「古座小山」と呼ばれていたようである。西向小山氏は、那智御師である南光坊道範に四貫五〇〇文を貸すことができ、また潮御崎神社の造営にあたっても大旦那として五貫文(以上)の負担をするなど、大きな経済力を有していた。

次に「田島之日記・かいとま日記」【西向二二号】から、西向小山氏が関係した土地を見てみよう【図3】。欠損激しい断簡であるため、史料の性格や接合関係など明らかにならない部分もあるが、そこに記載さ

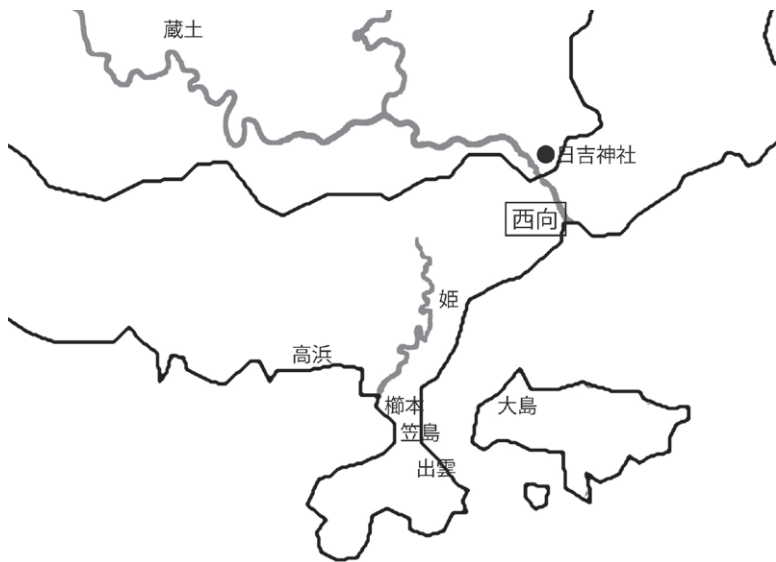


図3 「田島之日記・かいとま日記」に見える地名

れた地名が西向小山氏と深い関係のある土地であることは間違いないだろう。そこでその地名を見てみると、古座川右岸(西岸)、潮岬・大島の地名が見られ、古座川以北(左岸)の地名はほとんど見出せない、という特徴が見られる。古座川左岸は高川原氏が勢力圏とし、日吉神社の座席も高川原氏と西向小山氏とで別れて座していたことも関わろう。さらに、「池口南殿」「彦二郎殿」「蔵土上殿」といった殿原層も見られる。蔵土は、古座川中流部の古座川町上蔵土・下蔵土、池口は古座川河口部の地名であり、古座川流域の殿原層との関わりが見られるのである。特に蔵土には室町期の宝篋印塔も残る。同じように「惣」「惣中」として、「蔵土惣」

として、「蔵土惣」が「四村惣中」が見える。四村については比定できないが、蔵土は先に触れた古座川中流域の村である。しかも、それが「惣」として登場していることに注目したい。このように河口部に本拠を形成し、山間部の地域とも関わりつつ活動する熊野水軍としては、安宅氏や鶴殿氏などが類似

する存在と言える。

二 久木小山氏の本拠とその性格

1 久木小山氏の本拠

小山氏は、鎌倉時代の末期に熊野で蜂起していた「熊野海賊」「熊野悪党」を鎮圧するために派遣された御家人とされる。ただし、久木小山家文書には小山氏来住以前の文書も一定量含まれ、文書自体も小山氏が宛先となっているものばかりではない。小山氏来住以前には、西牟婁地域では久木氏を中心とする荘官層が割拠していたものと思われる。今回の小山家文書の調査においては十分に検討できなかったが、土佐国大忍荘「安芸文書」において村上絢一氏が示唆されるように（本報告書 村上絢一「土佐国大忍庄「安芸文書」の成立過程」参照）、伝来経緯を異にする文書群を解きほぐしながら、小山氏来住以前の問題（地域社会の様相）を位置づけていくことも今後求められよう。

久木氏は日置川中流の久木を本拠とし、「政所」「土井」ともいわれ【四六・七九・一二一・一二四号】、また年貢・公事などを徴収する「三ヶ庄安居村預職」でもあった【神宮寺七号】。この時期の文書群は、周参見荘・安宅荘・生馬郷（荘）・富田荘・三箇村に関わるもので、庄司・政所・地頭・預（所）・公文・代官など、いわば荘官層に関わり免田・年貢など権利関係の内容を表すものが主体を占める。小山氏以前の勢力とは、かかる荘官層であったことは間違いなからう。その一方で、久木明神社（教子明神社）の神主職は名主層によって担われており【一二六号】、必ずしも荘官層・在地領主層が地域社会を主導していたわけではなかった。

南北朝期以降、小山氏が来住・定着するも、久木氏に名跡を乗っ取ら

れてしまう（以後、久木小山氏となる）。久木小山氏は日置川中流域（山間部）の三箇荘に拠点を構えた【図4】。久木小山氏の本拠である三箇荘久木周辺には、屋敷跡（付近には「的場」の小字も残る）、日置川の対岸には、向平城、菩提寺の徳清寺、氏神の教子明神社があった。久木という場所は、小山氏が来住する以前に当地で勢力を誇った久木氏の本拠であり、それが引き続き本拠として利用されていたのだろう。

教子明神社の勧請年代は不明であるが、正応四年（一二九一）の文書に「久木大明神」とあらわれ【一二六号】、教子大明神社のことと思われる。その神主職が名主層とおぼしき人物に宛てがわれている。恐らくは、荘園の鎮守社的な存在であったのだろう。久木小山氏の氏寺と伝える徳清寺については、縁起や中世史料での所見はないが、平安時代（十一世紀）の阿弥陀如来坐像、同じく平安時代（十二世紀）の釈迦如来坐像が伝えられている。久木大明神（教子大明神）社の別当寺的な存在として、平安期より存在していたのではないだろうか。なお、現在徳清寺は日置川右岸へ移転しており、中世の石造物（五輪塔や宝篋印塔などの残欠）も一定数残る。久木小山氏が本拠・氏神・氏寺化しているところは、いずれも小山氏来住以前から存在した（久木氏の拠点であった）。すなわち、久木氏と小山氏の関係性については今後の課題としておきたいが、平安・鎌倉時代から江戸時代（さらには近代まで）継続して利用される地域であった点に注目しておきたい。

さて、久木小山氏の活動が文書上明確化するなかで、久木小山氏は具体的に日置川流域でどのような活動をしていたのか、本拠景観がどのようなものであったのか、室町期以降の史料をもとに確認してみたい。小山庄次譲状【一二号】には、向平に「ふなつけ」二所のあることが注目される。向平は久木の対岸にあたる場所であり、久木小山氏は日置川中流を両岸から抑えていた（向平城が築かれている）。しかも「ふなつけ」、すなわち「船付」と呼ばれていた点が重要だろう。日置川の航行

する川船の存在を想定させる。特に室町期以降、久木小山人家文書には土地売券が増えるが、向平（向出原）村の土地が多くを占める。「向平」「向出原」という地名自体、久木村から見た命名であり、久木村から開発が進められた村とも考えられよう。河川中流域の拠点化も徐々に進行していた。

久木小山人家文書には土地売券なども多く残るが、それらは主に室町期（特に俊次の代）以降のものである。久木小山氏が日置川流域（安居・向平・宇津木など）で相博・売買などを通じて、土地を集積していたことがわかるのである。このような売買は、周辺地域の人々に対して、領主として米銭を融通したとも考えられる。結果、土地のみにとどまらず、領主者なども集積し、家産を形成し、より在地との関係が緊密化していった。

2 久木小山氏と西牟婁地域社会

その一方で、久木小山氏は日置川中流域の山間部を拠点にしていたことも背景にあり、山林資源・山の支配権（「熊野奥檜山支配」権）を有する存在でもあった。¹⁵史料上、豊臣期の様子しか判明しないが、材木の調達・搬送などを担っていたり【二八・三〇〜三五号など】、また鹿狩りのできる山林（三ヶ川山）を有し、安宅氏に貸したりもしており【九・神宮寺九・神宮寺一〇号】、古くより山林資源と関わる活動をしてきたものと思われる。これらの点も久木小山氏の大きな特徴である。

ただし、久木小山氏は山間部のみで活動していたわけではなく、広く紀伊半島沿岸域に所領を有し、沿岸部での活動が見られた。特に所領では、日置川・富田川という複数の河川流域との関係（所領の領有）が見られること、特に富田川中流（堅田荘・生馬荘・鮎河など）と深い関わりが見られる点が特徴的である【図5】。

さらにより細かな地名にも着目すると、日置川下流域の「浜田」「前

田」という土地を有していた点も注意される【六〇号】。「前田」は安宅氏の本拠安宅本城付近にあった土地で、この場所を小山氏が子孫等に処分・相伝していた【一二号】。小山氏は山間部に拠点を置きながらも、複数の河川流域の所領、河口部の土地を有することで海へのアクセスを確保していたのである。このような河川との関係を軸として、紀伊半島西南沿岸部の地域・所領（堅田荘・周参見荘・印南郷、袋・見老津など）との関わりも持つことができたのである。

山間部に拠点を有し、沿岸部でも活動していた熊野水軍としては、色川氏が類似する存在と言える。西向小山氏と久木小山氏とは同じ一族であっても、本拠の景観は大きく異なる。むしろ小山氏は同じ一族で、熊野水軍の二つの存在形態を示していることが興味深い。本拠がどこに置かれるかの違いはありつつも、河口部（浦や湊）と河川（上・中）流域とは、資源などの問題も含め、密接な関係にあるという点には注意して



図5 小山氏関わった紀南沿岸部地域

おきたい。

三 熊野の武士の海域活動

1 南北朝内乱と熊野の武士

南北朝期において、西向小山氏・久木小山氏は紀伊水道をまたにかけて活動していた。この点については、西向小山家文書を中心に検討をおこなった網野善彦氏の研究がある。当該期の西向小山氏は、田辺の城郭を攻めていたり、塩崎氏とともに小豆島・淡路・沼島などの戦いに参戦していたりした【西向七・八号など】。また同じく潮崎氏とともに、日高郡小池荘の安堵を受けている【西向一七号】。小池荘は現在の和歌山県美浜町・日高町に位置した荘園で、範囲は不明ながら日の岬・煙樹ヶ浜付近に位置する荘園である。こういった場所を宛てがわれているのも、まさに水軍領主としての活動の結果と言えよう。

久木小山氏も、元亨三年（一二三二）には阿波国勝浦新荘小松島浦（徳島県小松島市）で、船舶のなかに海賊船が紛れ込んでいないか確認するなど（小松島浦の船は定紋の唐梅とする）、船の検察をしていた【六三号】。そのほか、阿波国立江荘（徳島県小松島市）を宛てがわれているなど【五三号】、阿波との関係が深い。

南北朝期の西向小山氏・久木小山氏は、瀬戸内・淡路・阿波、すなわち紀伊水道をまたにかけて活動するため、熊野の海賊・水軍領主の典型と位置づけられてきた。では、ほかの熊野の武士たちはどうだったのか、鎌倉末期以降、熊野地域で活動・割拠していた武士たちにも焦点を当て、その存在形態と動向について確認していきたい¹⁶⁾。

安宅氏 安宅氏は、日置川の河口部にあった安宅荘（白浜町）に本拠を構えた武士である（詳細は、本報告書の佐藤純一「熊野水軍が築いた城

館—史跡安宅氏城館跡を中心に—」参照）。観応元年（一三五〇）には、足利義詮により沼島以下海賊退治を命じられ【安宅四号】、同二年ならびに文和元年（一三五二）には竹原荘本郷（徳島県阿南市）地頭職・牛牧荘（徳島県阿南市）地頭職（立江中荘地頭職の替）、萱島荘（徳島市・北島町）、地頭職（桑野保（徳島県阿南市）替として）が安堵され、また勲功賞として宛てがわれている【安宅五〇九号】。安宅氏は早い段階より北朝方として、しかも阿波・淡路の海域での活動を行っていた。

安宅氏は実際に阿波国での足跡が知られる。竹原荘本郷地頭職は、「安宅・須佐美（周参見）一族御中」に対して宛てられているように【安宅五号】、安宅氏と周参見氏が一体として認識され、また共同で所領経営がなされていた。しかも、文和三年（一三五四）橘（安宅）頼貞と清原（周参見）氏実は、竹原荘本郷恒貞名内の畠二反を泉福寺に寄進していた¹⁷⁾。正平十四年（一三五九）には、周参見氏とともに阿波国へ発向している【安宅二号】。

また、阿波勝瑞（徳島県藍住町）にあった聖記寺の開山である留心安久は、「阿州人、俗ハ安宅」ともいわれる¹⁸⁾。聖記寺は、応永年間（の後半）頃に阿波国守護細川氏によって守護所「勝瑞」（吉野川水運の要衝である「勝瑞津」）整備の一環として創建された寺院とされる¹⁹⁾。そのほか、阿波の田浦城（徳島県小松島市）・牛岐城（徳島県阿南市）は安宅氏の城館跡と伝えられる²⁰⁾。このように安宅氏は阿波国にも足跡（伝承も含め）が残されていた。特に、宛てがわれた所領をみると、いずれも阿波国の沿岸部（吉野川・那賀川河口）などの交通の要衝であった点も重要だろう。紀伊水道を股にかけて活動していた水軍領主である安宅氏（および周参見氏）の姿が見て取れる。

さらに、安宅氏と瀬戸内地域とのつながりを考えるうえで注目されるのが、大古の長寿寺から出土した備前焼大甕である（紀伊半島と備前焼

の流通状況については、本報告書の北野隆亮「紀伊半島における備前焼の流通」参照。「暦応五年」（一三四二年）、「備前国住人香登御庄」（岡山県備前市）「あ□らふ也」など、年号や地名、魚や僧の絵、菊の紋などが記され、誂えたもの（特注品）であることも分かる。年号の記される備前焼としては最古のものとして注目されている。水の子岩沈没船のバラスト（船底に敷いた円礫）も日置川流域の石を積んでいるという指摘があり、瀬戸内海と紀伊半島（日置川流域）との交易の実態を伝える遺物として重要である。南北朝期には安宅氏は紀淡海峡を股にかけて活動していたこと、また注文生産をなしうるような勢力は安宅荘内では安宅氏において他に想定し難く、安宅氏と瀬戸内地域との密接な関係性を想定させる。

周参見氏 周参見氏は、周参見荘（すさみ町）のうち、周参見川の河口部を本拠とした一族である。観応二年（一三五一年）、周参見氏は安宅氏とともに阿波国の所領竹原本荘内本郷地頭職を宛てがわれ、共同で所領経営をしているなど【安宅五号】、安宅氏と対等な存在であった。

文和三年（一三五四年）、橘頼貞と清原氏実は竹原荘本郷恒貞名内の畠二反を泉福寺に寄進している。²³このうち、橘頼貞は安宅氏、清原氏実が周参見氏とされる。さらに清原氏実は、貞治五年（一三六六）六月には鶴林寺（徳島県勝浦町）の町石道の整備をし、町石（七丁石・八丁石）の願主となっていた。²⁴正平十四年（一三五九）には、安宅氏とともに阿波国へ発向している【安宅二号】。安宅氏と同様、南北朝期において、周参見氏は阿波に所領を宛てがわれるだけでなく、阿波の所領内での活動・足跡も見られる。

潮崎（汐崎・塩崎）氏・泰地（太地）氏 潮崎氏は紀伊半島最南端の潮岬（串本町）を拠点に、泰地（太地）氏は紀伊半島東部の半島状に突出した太地浦（太地町）を拠点とした。ともに、熊野那智山の御師であるが、泰地氏は新宮・本宮の御師をつとめる一族もあり、熊野三山それぞれ

れと非常に深いつながりを有していた。

小山氏と潮崎氏は婚姻関係を結んでいたともいわれ（『紀伊続風土記』）、後醍醐天皇・後村上天皇からの綸旨は、小山氏・潮崎氏連名宛てで発給されており、小山氏と潮崎氏との横の繋がりが見られる【西向一五・一七号など】。また暦応三年（一三四〇）、潮崎氏は泰地氏とともに、北朝方から周防国竈門関へ摂津国尼崎まで、すなわち瀬戸内海の廻船警固を命じられ、兵庫島では櫓別銭の徴収を認められている。²⁵また貞和三年（一三四七）堺浦への襲撃に際し、畠山国清から催促を受けている。²⁶このように潮崎氏・泰地氏は瀬戸内海の海域で「警固衆」としての活動が見られるのである。

徳島県小松島市には中郷城跡（泰地城跡・藤原兼時屋敷跡）があり、泰地氏の城跡とも伝えられる。²⁷安宅氏・周参見氏・泰地氏ともに、阿波では吉野川・那賀川河口や沿岸部にその足跡が見られ、文書に残る所領と伝承が残る地域とが近似する点は興味深い。²⁸

鵜殿氏 鵜殿氏は、熊野速玉大社と熊野川（新宮川）を挟んで向かいに位置する鵜殿荘（三重県紀宝町）を拠点とした。海を見下ろす丘陵部に城を構え（鵜殿城・飯盛山城）、普段はその麓の館に住んでいたと考えられる。鵜殿氏は、鎌倉期には吉田俊経（坊門家）の熊野参詣の際には御師として参詣の世話役（祈禱）をしている（『経俊卿記』）。また一族のなかには、新宮別当家の一員となり、那智山執行となるものもいた。²⁹

鵜殿氏は、水軍領主であると同時に、材木などを京都（法勝寺造宮）に運ぶ新宮問丸（東福寺問を兼帯）としても活動していた【そのほか一号】。このような淀川水系への流通とも関わってか、摂津国にも鵜殿荘（大阪府高槻市）があった。鵜殿実重は、熊野二郎とも称し、熊野本宮・新宮別当の源増の子息で、元弘年中（一三三一〜一三四）南朝方として活動し、河内国に所領を与えられたあと、建武年中（一三三四〜三八）に北朝の尊氏方に属し軍功を挙げ、摂津国に所領を得たという。³⁰鵜

殿氏との関係は不明ながら、十四世紀半ば頃には淀川（右岸）の摂津鶴殿の地には「鶴殿関」があった点にも注意しておきたい。

また鶴殿一族墓所の石塔群は天霧石（四国産）製のものもあるという。²⁹このように大阪湾、瀬戸内との関わりが見られる一方で、鶴殿遺跡（鶴殿城）の出土遺物（山茶碗など）からは、日常的には東海地方との関連が深い。³⁰戦国期には甲斐武田家の御師なども勤めていた【鶴殿四六号】。一族のなかには（恐らく室町期頃に）三河国へ定着し、三河の有力な勢力として、今川氏や徳川氏の被官（国衆）となるものもいた。³¹南北朝期には、瀬戸内や大阪湾周辺への動きも見られるが、室町期以降、東海地方とのつながりが密になっている。

色川氏 色川氏は那智山西方の山間部の色川郷（那智勝浦町）を拠点とした武士である。色川氏は、平清盛の孫である平維盛の子孫だと伝えられ、色川には平家が家紋とした蝶文様の旗が残されている。色川氏が伝えた色川文書については、本報告書の呉座勇一「色川文書」所収の忠義王文書に関する一考察³²を参照されたい。

色川盛氏軍忠状案【色川七号】から、延元元年（一三三六）に色川盛氏が南朝の奉行に参り、自らの軍功を列挙し、恩賞を求めたことがうかがえる。色川氏が後醍醐天皇の命令を受けて南朝方の武士として一族あげて出陣し、北朝の勢力と戦っていたことがわかるのである。延元元年三月上旬には、色川氏は泰地（太地町）・那智（那智勝浦町）で合戦をし、二十人ほどが疵を受けたようである。五月十四・十五日には浜宮（那智勝浦町）・佐野（新宮市）に敵が押し寄せてきたので、色川氏は新宮山（新宮市）で迎え撃ち戦った。その戦いで、足利氏の一門である石塔義房や下熊野法眼以下の凶徒は、数百艘の船に乗り塩崎浦（串本町）へ逃げて行ったので、色川氏等も兵船に乗り合戦をしたという。七月八日に色川盛氏は上洛に付き従った際、赤松貞範と山崎（京都府大山崎町）で合戦になり、同九日には向大明神（京都府向日市）の林で凶徒等

を追いかけ散々に合戦をしたようである。色川氏が熊野の沿岸部で海戦を行っていたこと、さらに南朝勢力の一員として上洛の供をし、京都でも戦っていたことがわかる。山間部に拠点を持ちながらも、船に乗り海戦を行い、また京都へも従軍していた。

* * * * *

このように南北朝期の熊野の武士たちの多くは、阿波・淡路・瀬戸内などの海域で活動していた。「熊野衆」（熊野海賊）「熊野凶徒」ともあらわれる）が堺・瀬戸内や薩摩国（東福寺城）などの戦いに関わっていたことよりすれば、³³「熊野衆」が広範な地域（特に西日本）で活動していたことは間違いなからう。残された史料だけからいえば、阿波・瀬戸内との関係が一番緊密化していた時代でもあり、熊野の武士たちがあつる程度の一団（連名）となつて行動していた点にも注目しておきたい。これは室町・戦国期にはあまり見られない側面でもある。

2 室町期・戦国期の熊野の武士

室町時代になると、熊野の武士たちの海域での活動は、文書・記録の上では影を潜める。一方で、この時期は、熊野の武士たちの本拠地の整備が進められていく時期にあたる。熊野速玉大社古神室の調進（朝廷・幕府・守護による）に特徴的なように、南北朝末・室町期の熊野では内乱からの復興が進められていた。それは熊野三山以外の地域、すなわち熊野の武士たちの本拠においても見られた。例えば、先に見たように西向小山氏は応永元年（一三九四）に日吉神社の勧請をしている。同様に、安宅氏が本拠とした安宅荘においても、正平年間（一三四六）五五）には安宅八幡神社の勧請が行われ、応永二年（一三九五）には板絵八幡神像が作成されている。³⁴戦乱からの復興、広域的に活動していた熊野の武士たちが土着化（地域社会との密接化）を深めた結果かとも思われる。久木小山氏も、文書から見ると同様の傾向がうかがえる（「解題

紀州小山家文書」参照)。

そういったなか、熊野の武士による海域活動を考えるうえで、戦国期(十六世紀)の事例となるが、安宅氏と日出神社(出月宮)との関わりが注目される。日出神社は、日置川河口部に位置する神社で、大永二年(二五二二)に安宅大炊助により一門繁昌などを祈って造営がなされている。³⁴⁾造営の際には、荘内外の一〇〇人を越える人々が関わっていた。造営に関わった人々は、①寺坊、②殿の敬称が付く者、③村名・地名+通称・名前で示される者の三階層に分類でき、とりわけ③の地名を見るに、安宅・安居・日置・矢田・塩野・口谷など日置川流域の村々、さらには周参見・江住・里野・朝来帰など周辺沿海部の村々(地下中・村中としての奉加)が見られる点が興味深い(詳細な分析は本報告書の佐藤論文を参照)。神社が日置川の河口部に位置することからも明らかのように、安宅荘内だけにとどまらず、日出神社が日置川流域、周辺沿岸部の中心(湊)として、信仰を集め、機能していたことを物語る。

十五世紀半ば頃になると、紀伊守護畠山氏の内訌にともなって、熊野の武士たちもその争乱の渦中に否応なく巻き込まれることになる。ただ、その戦い自体、紀伊国、なかでも日高郡と新宮までを範囲としており、あまり他国等へ従軍した形跡はみられない。そのため、熊野の武士たちが水軍として海域で活動した様子もほとんど見られない。久木小山氏は、(恐らく永正十七年(二五二〇)と十八年頃に行われた広城(広川町)をめぐる戦いで)「御渡海御合力」をするなど【二一九号】、海を渡って合戦に駆けつけていた。また久木小山家文書をみると、久木小山氏や安宅氏等は、紀伊の中部で勢力を誇った湯河氏や山本氏といった奉公衆から、熊野三山の動きの情報を求められているなど、熊野地域(特に新宮・那智)との密接なつながりはあった【九三・九五・九六・一二五号など】。久木小山氏の所領形態をみると沿岸部や河川河口部にも所領を有しており、海域での活動は継続していたものと思われる。当該期

は熊野の武士たちを編成するような勢力の影響が十分に及ばなかったため、熊野の武士たちはそれぞれ独自の行動を展開し、戦乱も広域的でなかったのだろう。その結果、史料的に海域での活動が見えづらくなっているのではないだろうか。

では、久木小山氏以外はどうだったのだろうか。いずれも海域での活動を直接うかがわせるものはないが、広域的な交流関係を有していた点は認められる。「石山合戦」時、熊野衆が大坂湾へ参戦していたことは特徴的である(善照寺文書)。そのほか、戦国期の鶴殿氏は先にも述べたように、甲斐武田家と師檀関係にあった【鶴殿四〇六号】。また、永禄(二五五八〜七〇)頃には新宮七上綱とされる箕島氏と泰地氏とは、安芸毛利家との師檀関係をめぐって争っている。³⁵⁾熊野の武士たちは、東国・西国の大名家と師檀関係を結ぶことでつながりを有していた。

そのほか、潮御崎神社(串本町)の大般若経(『紀伊続風土記』には「御崎之宝経」と呼ぶ、現在は高松寺蔵)は、永享三年(一四三一)と同七年にかけて肥前松浦の智教によって書写された一筆経であり、どのような目的、ルートで訪れたのかは判然としないが、九州と熊野との結びつき的一端がうかがわれる。³⁶⁾このように見るならば、文書史料にはほとんど表れないが、熊野海域における、人・物の移動は少なからず行われていたと評価できよう。その規模や担い手などについては、考古学的な資料もあわせて検討していくことが求められる。

3 織豊期の熊野の武士

天正十三年(一五八五)の秀吉による紀州攻めにより、久木小山氏をはじめとする熊野の沿岸部の武士たちの多くは、秀吉に従った。結果、所領の安堵を受けたものの【二三号】、豊臣政権からの負担も余儀なくされた。特に、秀吉による天下統一事業から朝鮮侵略などの戦争への従軍、さらには京都・大坂における城郭・寺社などの天下普請などへの協

力が求められた。

熊野の山林資源は豊臣政権から特に注目されており、久木小山氏や安宅氏は大坂城・伏見城や天王寺などの建築資材の供出を求められている【二八・三〇〃三五号、神宮寺四・神宮寺五号・西向二一・そのほか二号】。その際、安宅氏・小山氏は大坂の材木屋や淀川の過書船奉行と交渉するなど、山林の管理、材木の切り出しにはじまり、京都・大坂への搬送などを担っていたものと思われる。ただ、安宅氏・小山氏は秀吉の奉行人等から再三の催促に対して、材木の抑留をすることもあったように、豊臣政権下になったとはいえ、容易には従わない気概をもつ存在でもあった。安宅氏・小山氏がどのように京都・大坂まで搬送したのかなど明らかにならない部分はあるが、当然、紀伊水道から大阪湾へと船で運んだ可能性が考えられよう。

また豊臣政権による朝鮮侵略にあたって、熊野の武士たちは「紀伊国船手」「紀伊国警固船」として、秀長・藤堂高虎配下で活動・従軍していた³⁷⁾。実際に久木小山家文書・西向小山家文書のなかには、久木小山氏をはじめとする熊野の武士たちが、秀吉の朝鮮侵略に伴う軍需物資の供出に対し、その負担していたことがわかる文書【一六一・西向一二号】がある。そのほか、朝鮮の「こもかい」(熊川)への城米預状【一〇四号】や、高麗の陣より日置川の弟へ所領経営を心配した書状【九二号】なども残されており、明らかに朝鮮(高麗)に行っていたことが判明する。織豊期においても、水軍領主としての活動の一端が垣間見られる。

なお、織豊期の紀伊半島では、熊野を本拠とする武士たち以外にも海域で活動する勢力がいくつも見られる。例えば、有田郡を本拠とした梶原氏は、室町期には既に「梶原海賊」とも呼ばれる存在で、永禄・天正期には(里見水軍に対抗するため)後北条氏にとって重要な水軍(海賊衆、「海賊商人」として活動し、江戸湾内で船の統括、海上の仕置きを任されていた³⁸⁾。梶原吉右衛門尉は、永禄五年(一五六二)に後北条氏に

迎え入れられ東国に下り、三浦郡内小坪(神奈川県逗子市)・岩戸(神奈川県横須賀市)に知行を与えられ、海賊衆として江戸湾岸の船の統括を行っていた。しかしながら、十一年には紀伊への帰国を申し出ているものの、北条氏は梶原氏へ里見氏との対決も近いと、東国への在国を依頼している。すなわち、梶原氏は東国と紀伊とを往反しながら、必要に応じて「傭兵的」に関東で海賊衆として働く、といった姿が看取される。そのほか、後北条氏は「熊野新造」の大船を購入していたり、梶原氏は「早船」「大船」を調達していたりするなど、後北条領内では紀伊(熊野)の船が用いられていた。また、「紀之湊」(紀伊湊)の佐々木刑部助の船が商売のため、紀伊水道・熊野灘を経由し関東へ行くことにつき異義なきことを、北条氏は梶原氏に認めている³⁹⁾。梶原氏は日高郡・熊野を経て、相模湾・江戸湾などで活動し、軍事のみでなく商業活動にも関わっていた。このように梶原氏を中心みると、関東と紀伊半島(紀の川河口部付近まで)とが、梶原氏を通じてはあるが、かなり密接な交流関係にあったことが想定される。

紀伊国北部の雑賀衆も、紀伊水道・瀬戸内・熊野の海域での活動が見られる。「石山合戦」時(一五七〇〃八〇)、「雑賀渡海衆」は大坂本願寺方として、大坂や播磨・淡路などへ水軍を派遣している。また雑賀衆の向井氏は、天正九年(一五八一)、村上武吉から過所船旗を与えられている。さらに雑賀衆の佐武氏は、天正期に熊野の堀内氏に協力し、三重県東紀州地域の有馬氏との戦いや、那智勝山城(那智勝浦町)での戦いに参加(警固船三十艘で兵糧を運ぶ)していた⁴⁰⁾。このような熊野での活動とも関わり、古座川河口部には雑賀衆の山本善内之祐弘忠が開基したとされる善照寺もある(『紀伊統風土記』)。織豊期の雑賀衆は、瀬戸内・熊野の海域において活動していたことが明らかとなる。

織豊期、紀伊の水軍領主は、他国の大名等にとって、水軍・海賊として重要な存在であった。紀伊半島の水軍領主が戦国・織豊期の争乱のな

かで、西へ東へ活発に移動していた状況がうかがえる。ただし、あくまでも戦乱に伴う人の移動である点には注意する必要がある。日常的な流通・交流についてうかがい知ることは難しいが、川関遺跡・藤倉城跡から出土した(十六・十七世紀の)国産・輸入陶磁器類からは熊野の国内・国際的な流通事情を知ることができる⁵⁾とともに、紀伊湊の商船が熊野を経て関東へ向かっているように、紀伊半島を越えて東国へも行く海運ルートが存在していたことは確かだろう。

おわりに —熊野の海域史を考えるために—

本共同研究においては、①久木小山家文書の分析と小山氏の位置づけに関する検討(総論、史料解題、弓倉論文)、②久木小山家文書を相対化するための文書群の比較(熊野の色川文書を取り上げた呉座論文、文書群形成という視点で比較対象となる土佐芸文書を取り上げた村上論文)、③熊野水軍の本拠景観や動向に関する検討(佐藤論文、白石論文)、④紀州(熊野)の浦・湊に関する検討(春田論文・白石論文)、⑤考古資料を中心とした中世紀伊半島の流通に関する検討(佐藤論文・北野論文、資料編(考古))、⑥熊野の地域性に関する検討(呉座論文、佐藤論文、白石論文)、などについて明らかにしてきた。論点は多岐にわたるため、総括は容易ではないが、ここでは総論で取り上げた③を中心に、①・⑤にも少し触れつつ、熊野の海域史を考えるうえでの課題について述べ、まとめとしておきたい。

一口に熊野水軍(熊野の武士)と言っても、出自や存在形態など極めて多様で、バリエーション豊かであることが明らかとなった。特に島嶼がほとんどない熊野の沿岸地域においては、瀬戸内の海賊のように海城を築くわけではなく、沿岸(河口)部に拠点を有して河川・港湾を押しやるような勢力もあれば、山間部に拠点をもちつつ(山林を領有しつ

つ)沿岸部でも活動する勢力もあった。熊野においては広い平野部を確保できる地が少ないため、必然的に熊野水軍の各氏も山・河(川)・海といった地域的(自然)特性を活かしつつ、またその相関係のなかで活動することになった。むしろ、このような点にこそ、熊野水軍(熊野の武士たち)の大きな特徴がある。

熊野の武士たちは熊野三山に緩やかに統合されつつも協調と対立をしていたが、歴史的に見た場合、治承・寿永の内乱期の熊野別当、南北朝期の南朝勢力・北朝勢力、室町期の紀伊守護畠山氏、豊臣期の豊臣家(藤堂高虎)によって、水軍領主として編成されつつ、各地の戦場へとかり出されていた。こういった関係のなかで、文書史料にも水軍領主としての熊野の武士たちの姿が表出する。

しかしながら、文書史料からうかがうことのできる熊野の武士たちの動向は、あくまで政治的・軍事的なものであり、日常的な流通・交流については微かに見える程度である。その点、今後の課題として、①熊野三山への人・モノの動きの実態解明、②考古学を中心とした日常的なモノの移動(流通)をどのように位置づけるのか、といった視点が挙げられよう。本共同研究においては、熊野三山への年貢(物資)輸送や参詣者の状況、文書史料と考古資料とを統一的に捉えた交流史を描くまでには至らなかったが、そのための基礎資料を提示することはできたものと考ええる。

特に熊野は、時代によってその比重は変化するものの、東日本・西日本、両方向とのつながりが見られる点こそが重要である。熊野に視点を据えて、太平洋岸の東西交流史を構築する必要がある。そのうえで、関東・東海と接続する伊勢湾岸、熊野灘・紀伊水道、大阪湾、瀬戸内海、南四国・南九州へとつながる南海航路と、各海域との接続を進めることが可能になるだろう⁶⁾。

最後に、熊野水軍各氏も近世になると大きく変貌を遂げることにな

る。熊野水軍各氏も、沿岸部で遠見番役を務めるもの、地主となるものなど様々であった。熊野水軍各氏の近世的な展開についても、久木小山家文書からうかがうことができるが、いずれも今後の課題である。

注

- (1) 永島福太郎「中世の熊野」(『和歌山の研究』2 古代・中世・近世編) 清文堂出版、一九七八年)、高橋修「別当湛増と熊野水軍—その政治史的考察—」(『ヒストリア』一四六号、一九九五年)。日置川町誌編さん委員会編『日置川町史』第一巻 中世編(日置川町、二〇〇五年)、高橋修編『熊野水軍のさと—紀州安宅氏・小山氏の遺産—』(清文堂出版、二〇〇九年)、高橋修「海辺の水軍領主、山間の水軍領主—紀州安宅氏・小山氏の成立とその基盤—」(『鎌倉遺文研究』一六号、二〇〇五年)、白浜町教育委員会・安宅荘中世城郭発掘調査委員会編・刊『安宅荘中世城郭群総合調査報告書』(二〇一四年)など。
- (2) 拙稿「熊野水軍小山氏をめぐる資料」(『和歌山県立博物館研究紀要』二二二号、二〇一六年)、同「熊野水軍小山氏をめぐる資料(2)—神宮寺小山家文書—」(『和歌山県立博物館研究紀要』二二三号、二〇一七年)。
- (3) 網野善彦『日本中世史料学の課題—系図・偽文書・文書—』(弘文堂、一九九六年)。
- (4) 「特集 紀南の海と中世の戦乱—熊野水軍と安宅氏・小山氏—」(『軍記と語り物』五六号、二〇二〇年)にて、呉座勇一「中世熊野と戦乱—文学と歴史のあいだ—」、坂本亮太「熊野水軍と紀州小山家文書」、佐藤純一「日置川流域と安宅氏城館跡」として中間報告を行っている。あわせて参照願いたい。
- (5) 網野善彦『日本中世史料学の課題—系図・偽文書・文書—』(前掲注(3))。
- (6) 西向小山家の菩提寺は古田の六勝寺で、成就寺は江戸時代に女性が旦那寺としていた寺院である(近世 西向小山家文書三九・四五・四六号など、いずれも『紀州小山家文書』(日本評論社、二〇〇五

- 年)所収)。
- (7) 高川原氏は申本町中湊を本拠とした武士で、平維盛を祖とする。屋敷は正法寺とも青源寺とも伝えられる(中根七郎「古座の寺院」(『中根七郎遺稿集 古座史談』一九三四年))。
- (8) 中根七郎「神社と古座」(『中根七郎遺稿集 古材史談』一九三六年)。
- (9) 実際に室町〜江戸時代に造像された日吉二十一社本地仏像(室町〜桃山期のもの十四軀、江戸時代のもの七軀で計二十一軀)、室町〜桃山期と推定される懸仏八面が残させる(拙稿「熊野水軍小山家をめぐる資料」(前掲注(2))。
- (10) 明和四年(一七六七)の棟札によると、「当宮稲荷大明神者、小山氏当古城在住之砌、奉勸請城内鎮守也」と記される(福島隆樹編『西向稲荷神社—地域の歴史・文化を探る—』西向 原町区・上ヶ地区、二〇一四年)。
- (11) 拙稿「文献史学(中世史研究)的考察」(白浜町教育委員会・安宅荘中世城郭発掘調査委員会編・発行『安宅荘中世城郭群総合調査報告書』二〇一四年)。
- (12) 天文十六年十二月五日 南光坊道範借錢状(『熊野那智大社文書』四潮崎稜威主文書一六二二号)。
- (13) 文禄二年 潮御崎神社棟札(『戦乱のなかの熊野—紀南の武士と城館—』和歌山県立博物館、二〇二〇年)。
- (14) 日置川町誌編さん委員会編『日置川町史』第一巻(日置川町、二〇〇五年)。
- (15) 高橋修「海辺の水軍領主、山間の水軍領主—紀州安宅氏・小山氏の成立とその基盤—」(『鎌倉遺文研究』一六号、二〇〇五年)。
- (16) この点については、既に綿貫友子氏などの整理がある(綿貫友子「紀伊水道内海世界の物流と交流」、石井伸夫「紀伊水道内海世界における港津と権力—阿波からの視点—」、ともに中世都市研究会編『港津と権力』山川出版社、二〇一九年)。また個別には有馬氏や鶴殿氏などを取り上げた伊藤裕偉氏の成果もあり(伊藤裕偉「聖地熊野の舞台裏—地域を支えた中世の人々—」高志書院、二〇一一年)、参考にした。特に有馬氏の動向については、伊藤氏の著書もあわせて参照いただきたい。

- ゴメ石製とも言われている。
- (37) 三月十三日 豊臣秀吉朱印状 (『町史』II—1—31—95)、四月十九日 豊臣秀吉朱印状 (『町史』II—1—31—96)、文禄二年三月十日 豊臣秀吉朱印状 (『町史』II—1—31—98)、文禄二年五月二十日 豊臣秀吉朱印状 (『町史』II—1—31—99)、文禄四年正月十五日 高麗国出陣人数帳 (『町史』II—1—31—100) など。
- (38) 「大乘院寺社雑事記」長禄四年五月二五日条。なお、梶原氏は、明徳の乱で山名義理が熊野(当初の目的は鎌倉もしくは備後を目指す)へ落ち行く際、冷水浦の大船・水主を雇い、由良まで乗船させている(『明徳記』。ただし反逆者を船に載せたかどで商売に支障が出るのではないかという水主たちの反対もあり、途中の由良湊で下船させられている)。
- (39) 永原慶二「伊勢・紀伊の海賊商人と戦国大名」(『永原慶二著作選集六』吉川弘文館、二〇〇七年)、真鍋淳哉「海から見た戦国時代—北条水軍梶原氏の動向—」(『列島の文化史』一一号、一九九八年)、上野尚美「後北条水軍梶原氏と紀伊」(『沼津市博物館紀要』二六号、二〇〇二年)など。なお、後北条氏に雇われ、三浦半島に移り、安房里見氏との海戦で活躍した人物のなかに安宅紀伊守も見られる。
- (40) 永禄十一年七月十四日 北条家朱印状写 (『紀伊統風土記』。また上記文書と関連するか検討を要するが、帰国を認められるも、来年中に「国本儀相調」えたうえで、在国の証文を進上するように求めている(北条氏康書状写、『紀伊統風土記』)。
- (41) 天正十四年三月二十三日 北条家朱印状写(梶原家文書「紀伊統風土記」所収、『町史』II—1—31—85)。
- (42) 太田宏一「雑賀渡海衆—石山合戦期を中心として—」(『和歌山市立博物館研究紀要』一四号、一九九九年)。
- (43) 高橋修「新出の「村上武吉過所旗」について(上)(下)」(『和歌山県立博物館研究紀要』四・五号、一九九九年・二〇〇〇年)。
- (44) 武内雅人「佐武伊賀働書」史料解題の改訂および補遺(『和歌山大学紀州経済史・文化史研究所紀要』三二号、二〇一一年)など。そのほか、五月二日 榎箸良包書状(『熊野那智大社文書』三 米良文書一〇二五号)。
- (45) 中都市研究会編『港津と権力』(山川出版社、二〇一九年)では、「紀伊水道内海世界」を設定するが、瀬戸内—阿波—京都—大坂をつなぐ人とモノの動きは明らかにしたが、紀伊—阿波の地域間交流については課題が残る。その点、紀伊における考古学的な成果の整理も含め、紀伊半島における人・モノの動きに関わる基礎資料の提示がまだ求められている段階なのだろう。その先に、各海域との交流史が描けるようになるのではないだろうか。その点で、紀伊半島が果たす役割は重大である。